日高山脈の自然

―氷河調査を通じて感じたこと―

岩崎正吾

いわさき・しょうご
1970年3月12日大阪生まれ
帯広畜産大学卒業（在学中は山岳部で活動）
現在、北海道大学大学院地球環境科学研究科博士課程院生、地球環境科学修士
専門は第四紀学と自然地理学に基礎を置いた日高山脈の自然学（日高学）

本文のねらい・要点

原生の自然を保っている日高山脈。その日高山脈にも、じわじわと人為的影響が及びつつある。本文では、著者が氷河調査を通じて感じた日高山脈の魅力を紹介し、直面している問題と今後の課題について述べようと思う。

カールのある風景

日高山脈を紹介する文章には、必ずといってよいほど「カール」についての紹介があります。日高山脈の景観を特徴づけているカールは、アイスクリームをスプーンですくった時にできるような半椀状の斜面であり、これは今よりも寒冷であった時代に生じた氷河によって形成されました（写真1、2）。

私はその氷河が「いつ頃、どのように拡大し、消滅したのか？」ということを知るために、最近の約一〇年間、調査を続けてきました。年間一〇〇日以上におよぶ日高山脈での生活では、樹枝状に拡がる沢と網目状に伸びる獣道を、それこそ野生動物になったつもりで歩きまわってきたのです（写真3）。

ヒグマの住む山

「クマだ！」視界の片隅にまっ黒でずんぐりしたものを認めた時、私は直感的にそう考え、無意識に岩の影に身を隠そうとしていました。しかし隠れた岩は直径一m位しかなく、クマからは丸見えです。距離は二〇mほどしかなく、筋肉の動きがわかるほどに接近していました。

これは私が初めてヒグマに出会った時の様子です。一瞬の出来事でしたが、岩の影に隠れながら冷静でいられた自分が不思議です。ドキドキ、そしてちょっとワクワクしていたこの時が、日高山脈の自然を最もリアルに感じられた瞬間であったように思います。この時、自然生態系の中に生きた祖先の遺伝的記憶の一部がよみがえったような、そんな気がしました。幸運なことに、この時のクマは来た道を後戻りしてくれたので、私は今この原稿を書くことができるのです。この出会いの後、私はクマ避けのスプレーとクマ鈴、笛を必ず携帯するようになりました。それは自衛のためだけではありません。日高山脈の主であるヒグマの生活をできるかぎり乱さない為に（招かれざる？）客である私が最低限守らなければならないマナーなのです。このヒグマとの出会い後、たびたびヒグ

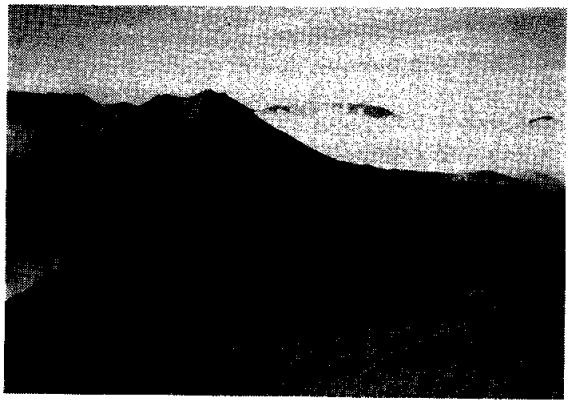

写真1：七つ沼カール。カール壁（釣り尾根）の曲線が美しい。中央の山がトッタベツ岳。

写真３：獣道を行く。登山道の様に快適だが、いきなり無くなってしまうのが難点。

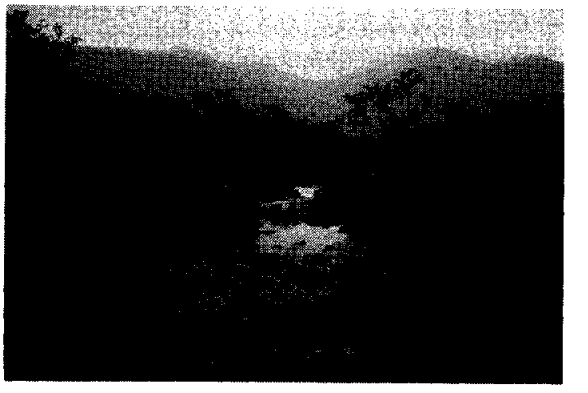

写真２：カール底の庭園。夏中涸れないせせらぎと、美しき高山植物の群落。

マに出会いますが、近距離で再会することはありません。これはヒグマの方で、私との距離を保ってくれているおかげなのです。

氷河調査の生活の半分はカールの中で過ごしますが、ここはヒグマを最も身近に感じられる場所です。カール内の融雪が進み地表面が現れる8月の半ば頃、カールはヒグマのホテル兼レストランとなります（写真4、5）。ここに現れるヒグマは子連れであったり単独であったり様々です。経験的に、子連れのヒグマは人を認めるとカール内から立ち去りますが、単独のヒグマはカール内に二人くらい人間がいても立ち去らないことが多いようです。私は独りで調査をしているので、カールで泊まるときは必然的に単独のヒグマと共生することが多くなります。私が調査からテントに戻ってくる夕方四時頃にカール内に現れ、私が調査に出る朝六時頃に茂みの中に戻っていく、というのがヒグマの生活パターンのようです。

このように日高山脈では、人間を自分の生息地に受け入れながらも、自分の生活スタイルを保って悠々と生きているヒグマの姿が身近に見られます。北海道の自然生態系の頂点に立つヒグマが本来の生活を保っていることは、すなわち日高山脈に原生な自然が残されているということの象徴と言えるでしょう。人慣れしていないヒグマを身近に感じられるという点では、日高山脈の自然は大雪山や知床半島以上に貴重と言え、将来的な環境教育の場としても重要になっていくと思われます。

写真４：ヒグマの食痕。あの巨体を直径数ミリの根っこを食べて維持していることは驚きである。

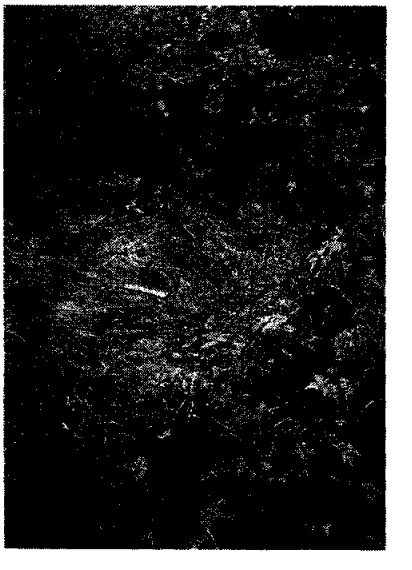

写真５：ヒグマの寝床。寝床を取り囲むように新旧のウンチが並んでいる。

日高山脈の現在

日高山脈の自然は、現在、大きく分けて2種類の人為活動によってむしばまれつつあります。その活動とは「登山」と「開発」です。

登山：最近一〇年間の実感として、日高山脈の登山者数は急増しています。特に最高峰のポロシリ岳（標高二、〇五二・四m）や二番目に高いカムイエクウチカウシ山（標高一、九七九・四m）では、かつては見られなかった登山者の行列が珍しくなくなりました。日高山脈の自然を多く人に知ってもらえるという意味では、登山者数の増加は喜ばしいことです。しかし登山者の増加はいっぽうでは自然環境に対する負荷の増大を意味しており、例えば、テント場の拡大や踏み跡の拡幅が目立ち始めています。また、高山植物の踏み荒らし、糞尿、ゴミの放置や焚き火（写真6）など、登山者のマナーの悪さが登山者数の増加以上に目立ってきています。

開発：日高山脈への林道の多くは昭和五〇年代以前に伐採や河川改修、電源開発目的で造られ、このうち伐採と河川改修のために造られた林道は、利用目的が達成された現在、路肩の崩壊や植生の回復によって年々短くなっています。人工物が自然の摂理の中で消えていくということは、日高山脈が元の姿に戻ろうとしていると理解でき、喜ばしいことです。一方、日高山脈中央部には、北海道開発庁（現、国土交通省）による一九七八年の計画以来、日高横断道路とよばれる開発道路の建設が進められています。日高山脈東麓の建設現場では、札内川に沿って山林が切り開かれており、ここには不釣り合いなまでに立派な道路と共に大きなダムも建設されています（写真7）。二〇年以上も前の計画に基づいてなし崩し的に行われ、完成の予定も立てられないでいるこの道路計画こそ、国の公共事業見直しの対象の筆頭に上げられるべきものでしょう。日高山脈の貴重な自然を破壊してまで作る必要性があるのかどうか、まずは工事を中断した上で社会的・経済的意義について改めて見直すことを望んでやみません。また開発という名の自然破壊は日高山脈中央部だけでなく、平取ダムや日高中部広域農道、大規模林道平取・えりも線など山裾においてもじわりじわりと進行しているのです。

日高山脈の未来

先に述べたように、日高山脈の自然は様々な時間的・空間的スケールで破壊されつつあります。この現状に対して私たちは、何をなすべきかを考え、それを早急に実行に移す必要があります。その際の参考として、日高山脈の自然を守る為に行われている、あるいは行われようとしている国と北海道、そして市民の取り組みの例をここに紹介する。

国の取り組み：作家の深田久弥氏が著した山岳紀行文「百名山」で取り上げられた百の山々では、中高年を中心とした登山ブームによって自然破壊が深刻な問題となっています。これに対し、環境庁が二〇〇一年度から登山道の整備や植生復元などの事業に乗り出し、その整備費として約十億円が予定されています。実際の整備にあたっては、名山のある都道府県が周辺市町村などと協力して登山道や標識、駐車場やトイレなどの整備、植生復元などの整備計画を作成し、これを環境庁がチェックするという方式がとられるようです。この事業の評価できる点は、環境庁が直接管轄しない地域の山をも対象としたことであり、日高山脈ではポロシリ岳のみがこの事業の対象となります。また事業を実施するにあたり、広く意見をつのる姿勢

写真6：焚き火にくべられたゴミ。札内八の沢出会いのテン場にて。

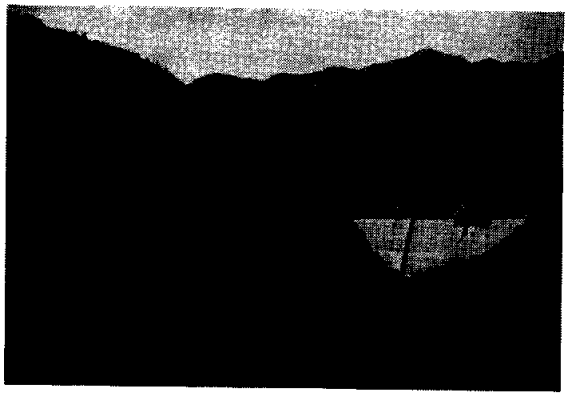

写真7：札内川ダムと日高横断道路。建設関係者はこの光景に疑問を持たないのだろうか？

を見せていることもこの事業の評価できる点と言えるでしょう。この事業がどの程度の効果をあげられるのか、どこまで市民の意見が反映されるのかは、我々市民の積極性にもかかっています。

北海道の取り組み：二〇〇〇年八月二六日、日高山脈の価値を見直そうと「北海道遺産フォーラム―日高山脈の自然と文化」が沙流郡日高町において開かれました。実質的な主催者は北海道です。当日は会場に用意された二〇〇席を上回る聴衆が集まり盛況でした。この盛況の原因が、日高山脈に対する市民の興味の高さによるものか、または基調講演した女優の影響なのかわかりません。この企画の成功・不成功はともかくとして、道がこの企画で何をやりたかったのか、この企画を日高山脈の自然や文化の将来にどのように反映させるつもりなのかに関しては新たな情報が全く伝わってきません。ドーン！と打ち上げる花火のように、企画自体が目的ではないことを祈るばかりです。

市民の取り組み：日高山脈には近年、地元の自然を愛する三つの市民グループが設立されました。発足順に「アポイ岳ファンクラブ」、「日高の森と海を語る会」、「日高山脈ファンクラブ」です。それぞれが個性的な活動を行っていますが、二〇〇〇年の五月に結成された「日高山脈ファンクラブ」の活動についてみると、エコツーリズムの勉強会や登山道の清掃、山小屋周辺の水質調査、登山者の意識調査など多岐にわたっています。このクラブは今の所、会員数五〇名強の小規模なものですが、活動性が高いという点において今後の活躍が期待されます。

ここに取り上げた以外にも、市町村、市民レベルで日高山脈の自然に対して大小さまざまな取り組みがなされつつあります。現在の所、それぞれが独立して活動していますが、日高山脈の自然の未来を思いやるという気持ちは皆同じはずです。それぞれの取り組みが大きな効果を上げるためには、「日高山脈ネットワーク」のような、一貫した連絡・協議システムがこれからは必要になってくるのかもしれません。

そのようなネットワークづくりと平行して、早急に（二〇〇一年度からでも）検討しなければならない問題が数多くあります。具体的には、(1)保護管理計画策定の為の、登山者数や環境意識など様々なデータの収集・蓄積、(2)物質循環の悪いカール（七つ沼カールや札内八の沢カールなど）における登山者数の制限や、簡易トイレの設置、テント場の指定などがその一例です。しかしながら問題の抜本的な解決には、長期的な視野に立って登山者（市民）の環境意識を高めていく地道な努力も必要でしょう。先に述べたように、日高山脈は環境教育の場にふさわしいと考えられる原生な自然を有しています。このような日高山脈を保全しつつ、有効に利用していくためには、「日高山脈ビジターセンター」のような組織も必要なのかも知れません。

学術調査の必要性について

「自然豊かな」あるいは「原始の」と形容されることが多い日高山脈ですが、その自然に関しては地質学以外（例えば生態学や自然地理学など）の研究が極めて立ち遅れています。言わば、日高山脈は学術的空白地帯なのです。このことは、日高山脈の自然に対する人々の認識不足を産み出しかねません。したがって日高山脈の自然を守っていくためには、学術的調査が必要不可欠と言えます。学術的な解明が遅れている最大の原因は険しい山容とヒグマにあるようです。そのような技術的・精神的な困難を乗り越えて、日高山脈の自然の語り部・使者となるような若い研究者が増えることが望まれます。

おわりに

二〇〇〇年の夏、ある日高山脈の谷の中で、水の中をすばやく泳ぐ黒い陰を見ました。体長七〇㎝ほどの胴長短足のほ乳類です。陸上の岩陰に逃げ込んでこちらを見ていたつぶらな瞳がひどく印象的でした。その場にいた一〇人あまりの人々で「カワウソだ！」と大騒ぎになりました。その真偽はともかくとして、毛皮目的で乱獲されたカワウソは北海道では一九五〇年代以降、私たちの前から姿を消してしまっています。そんなカワウソが、ここでは生き残っているのではないか、と思えるほどに日高山脈の自然は豊かなのです。

日高山脈は、交通網や移動手段が発達した現在でさえ、遙かなる山なみとして人間社会からの距離を保ってきました。そっとしておくことによってその自然が保たれるのなら、それが理想です。しかし明治以降、我々人間が北海道で行ってきた自然への行為を考えれば、積極的な活動無くして自然が保たれることがあり得ないことは明らかです。言うまでもありませんが、自然保護とは「人が自然を保護する」ということではなく、「人が自然に保護されている」ということです。我々が地球生態系の一員として生き残るためには、日高山脈の自然に見捨られないよう、新たな世紀に努力していく必要があるのではないでしょうか。